
消えた主人公は創造神

H O H J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた主人公は創造神

【Nコード】

N8196L

【作者名】

H O H J

【あらすじ】

ちよつとオタクっぽい普通の高校生の明神天斗^{みょうじんたかと}が自分の正体は創造神と知っているんな世界に行くお話です。

処女作なので誤字や脱字もあると思います。その時は、ご指摘下さい。

あとこの作品は作者の自己満足で書きます。暖かい目で見てください。と幸いです。

さらにこの作品はオリ主最強系です。

それが嫌いな方は、Uターンして下さい。

あと不定期ですができるだけ更新して行くのでよろしくお願いします。

プロローグ1（前書き）

駄文ですがよろしく願います。

プロローグ1

天斗side 俺は明神天斗みょうじんたかとちよつとしたエロゲや漫画、アニメ、ゲームが好きな普通の高校一年生だ。今白い部屋で光りに包まれてる。今起きた事を整理しよう。

いつも通り学校に行きいつも通り家に帰って少し勉強して7時頃に飯を食べ、8時頃にエロゲのあか坂を初めミコトさんが終わったので眠りに着いた。

ふつと目が覚めるとそこは白い部屋だった。辺り一面真っ白で何もない部屋で独でいるにわつらい場所だった。

<あれ？起きたはずなのに辺り一面真っ白だ。まだ寝るのかな？>

4

そう思っていると目の前が光りだした。

巻頭に戻るが光りが治まるとそこには白い髪、白い髭、白い衣装に身を包んで三本の本が絡みあったような杖を持った爺さんがいた。

天斗<何だこの「我は神じゃ」とか言いそんな爺さんは>

?「そうじゃわしは神じゃ、そしてあなたは、創造神です。」

事情説明中

天斗「つまり話をまとめると、あんたは、ゼウスで俺は、創造神で、此処は、俺の仕事部屋で、俺は、「人間に近い状態で地球に創造神だった時の記憶を封印して行って人間として暮らすから俺が、15 年ってから連れ戻してくれ」と言って人間界の地球に行ったと」

ゼウス「はいそうですそして私や他の神々、そしてほとんどの世界は貴方様がお造りになった物です」

天斗「それで、それを信じられるだけの証拠はあるのか？」

ゼウス「ならば、私では、完全に解く事はできませんが、記憶の封印を解きましょう。」

天斗「わかったそれでいい」

ゼウス「分かりました、それでは行きますよ、それ！！」

ゼウスは、そう言っ指をパチン！！と鳴らした。

すると頭の中にいろんな情報が流れ激しい頭痛に襲われた。

天斗「あ………たまが………割れ………る」

ゼウス side

天斗「あ・・・たまが・・・割れ・・・る」

今、私の目の前で創造神様が頭を抱えながらうつずくまっています。

天斗「ぐああああああ」

そろそろ治まる頃ですね。

天斗「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

天斗「そうか、だいたいのことはわかった」

ゼウス「そうですか、じゃあ仕事をしましょう」

天斗「嗚呼だがその前に、記憶を戻そう」

そう言うところ創造神様は、指をパチンと鳴らしました。

天斗 side

正直言つてゼウスの言ってたことは半信半疑だったがどうやら本当のようだ。

今、ゼウスに記憶の封印を少し解いてもらって確かめた。

そして自分で記憶の封印を完全に解いた。

天斗「よしこれでいい、ゼウス仕事しよう」

ゼウス「では、これが今までの書類です」

天斗「マジでか？」

ゼウス「ええそうですよ、何たって15年分ですから」

天斗「まあそれは、いいとしてお前いつまでその格好のつもりだ？
元の姿に戻れよ」

<つーかなんでそんな格好してんだ？>

ゼウス「それは、記憶が戻る前の貴方様に信じてもらえるようにです」

天斗「人の心を読むな、それと敬語使わず昔のように喋ってくれ
それから元に戻れ」

ゼウス「分かりました」

ゼウスは、そう言う光りを放ち光りが治まるとそこには、見た目
高校生で、背が170cmぐらい、茶髪に、瞳も茶色策略を張り巡
らせてそうな（まじこいの直江大和みたいな感じ）やつになった。

ゼウス「これでどうですか？創造神様」

天斗「なかなかいい姿になったな、それと昔のように話せそして今
度からは、『天斗』と呼べ」

ゼウス「わかったよ天斗」

天斗「よし、じゃあこれから仕事しよう」

ゼウス「では、頑張りますか」

こうして再び俺創造神としての人生（神生？）が始まった。

プロローグ2（前書き）

プロローグです。

プロローグ2

天斗side

あれからいろいろ有ってだいたい300年程たった。

えっその間の事教えろって？まあ大まかな事を教えよう。

まずあれから書類をかたずけたあといろんな神ヶとあった。

例を挙げるなら、ガイア（天空）やウラノス（大地）、アテナ（知恵）にアポロン（芸術）とか、イシス（魔法）、ジーク・ハルト（時、魔力全般の神）、アモン（破壊神）などだまだまだ居るが今はこのくらいだ。

それから、ゼウスを最高神にした。正直厄介ごとを押し付ける為だ。

これでゼウスを入れて最高神はアモン、俺、ゼウスは三柱目だ。
一番大事なのは、ほとんど修行に時間を使った事だ。

理由は、地球に行ったとき人間の身体になって連れ戻されたとき新しい神の身体になったら能力が下級神ぐらいしかなかったから。

でも今は、槍術、剣術など武術は、fateのサーヴァントよりも強くなったし、魔法や魔術などは、最強になった。（ジークよりも強くなった）

それと、そろそろある計画を実行したい。

だから、今久しぶりに神の会議に出席している真っ最中だ。

天斗side out

ゼウスside

何やらめずらしく天斗が出席しているがずっと考え込んでいる。

まあこんな時期に会議に顔を出したんだ何かいい提案でもあるのでしょうか。

ああこんな時期というのは、今問題になっている各世界のバグについて今回で調度30回目の対策会議でもあるからだ。

ジーク「では、世界運営対策会議を始める」

ゼウス side out

ジーク side

ジーク「では、世界運

営対策会議を始める」

俺の言葉とともに、出席している神達が静まり返る。

今回会議に出席しているのは、最高神3人と、俺、ガイア、天照大神、須佐之雄

座敷童子、アスクレピオス、夜刀神、ハデス、ホルス、

月夜見

の13柱だがめずらしく天斗がいる何か考え込んでいるから何かいい案があるのだろう。

ジーク「まずは各世界の状況の報告を頼むハデス」

ハデス「はいでは、報告します」

報告中

と言うわけで一部の世界以外は、何の問題もありませんが、その一部の世界は、バグの侵攻が進んでいます」

ジーク「わかったもったいいぞ」

ハデス「分かりました」

ジーク「では、対策について案がある方は、お願いします」

するとアモン殿がどうでもよさそうにこう言った。

アモン「面倒くせえからその世界全部消そうぜ」

ジーク「駄目です、そんな事したら世界全部のバランスが崩れてしまい全部の世界が滅びてしまいます」

ガイア「いつその事全部造り直してはいかがですか？」

ジーク「どれだけの時間と労力がいると思ってるんですか」

「「「「「「「「「「「うん」「」「」「」「」

「「「「」

天斗「馬鹿かお前ら」

ジーク side out

天斗 side

天斗「馬鹿かお前ら」

どう

も今回の会議は、いろんな世界で出来たバグへの対策案が主なものらしい。

だがさつきから世界壊すだの造り直すだの言ってる。

まあいい俺の計画のために利用しよう。

「どういつ事ですか？」

「簡単だ」

「何が簡単何ですか！！」

「誰かが世界を渡ってバグを直せばいい」

「何言ってるんですか、みなさん仕事や書類でそんな事出来ませんよ」

<計画通りだ>

「なら俺が行く」

「貴方はたくさん仕事があるでしょう」

「新しい世界を創らなければ書類なんてほとんどない、それに誰か代役がいれば問題無いだろ」

「分った、それにバグの侵攻が進んでも大変だからな」

ジークは諦めたかのようにそう言った。

「じゃあこれで行こう、それと代役はジークお前がやれ」

「仕方ないのでは、次何か報告はあるか？」

天照「確かエウリユアレーとステンノーからメドゥーサが行方不明

だと報告があるの」

須佐「そう言えばヘラクレスもいなくなっておる」

天斗「それについては俺に心当たりがあるから任せろ」

ジーク「もうほかに無いな、ではこれで終わりにしよう、『解散』」

天斗 side out

ジーク side

俺は会議が終わり部屋に戻るとそこには一人の女がいた。
？「会議はどうでした？」

部屋にいた女はそう言ってきた。

ジーク「ああイシスお前か」

彼女は、イシス俺の妻であり下級神の一人だ。

イシス「ええあなた、それからどうでした？」

どうやら会議の事が気になるらしくそう聞いてきた。

ジーク「ああやっど解決策が出た」

俺が答えるところ聞いてきた。

イシス「どんな方法ですか？」

イシスは興味深そうに言った。

ジーク「天斗が異世界を渡ってバグを直すらしい」

俺はそう言つとイシスは、珍しそうに「イシス「創造神様直々にですか？」」

と言った。

ジーク「何を企んでいるか分からないが仕方ないだろう」

俺が不安要素を言つとイシスは、少し楽しそうに

イシス「そうですね、あの方はたまに我々が思いもしない事をなさりますから」

そう言って笑った。

ジークside out

天斗side

俺は、会議が終わってすぐに部屋に戻り準備を始めていた。

例えば金ピカな人の王の財宝の倉庫バージョンに必要な物を詰め込めたり、行く世界を決めたりしてただけだ。

荷物を詰め終わってすぐに世界を渡ることにした。

天斗side out

???side

私は、天斗様の付き人をやっている神でラス・プーチンといいます。

今天斗様は、いろいろな物を空間倉庫に次から次へと入れていきます。

何でも天斗様は、これから世界を渡り歩くようです。

あつ今仕度が終わったようです。

プーチンside out

天斗side

仕度が終わったからこれから世界を渡ろうと思う。

「おいプーチン俺をf a t eの世界に飛ばしてくれ」

今俺の近くにいるプーチンは、確か天界から他の世界に飛ばせる神で俺の付き人をやってる神なのだが何の神だったか忘れた。

「では、行きますはあ!!」

プーチンがそう言うのと俺の足元に魔法陣が敷かれ光り出すと俺の意識が薄れて行った。

天斗s i d e o u t

光りが消えるとそこにはもう天斗はいなかった。

主人公設定

みょうじんたかと
明神天斗

創造神

最高神の一人で最も偉い神。

暇な為人間に近い状態で地球に行って15年後天斗の部屋に戻ってきた。

300年の間、修行をして今は、神の中で一番強い。

能力紹介（fate風）

C L A S S : J O K E R ジョーカー

マスター：？？？

真名：明神天斗

性別：男

身長178cm

体重53Kg

イメージカラー：虹

特技：ゲームの攻略

好きなもの：からかあこと、パクリのセリフ、

嫌いなもの：気持ち悪いもの

属性：中二、混沌、神

筋力：EX

魔力：EX

抗魔力：EX（調整可）

耐久：EX

幸運：？

敏捷：EX

宝具：EX

スキル

創造EX

すべてのものを造り出せる。宝具の能力なども再現出来る。

心眼EX

300年の間神ヶとの修行で手に入れた最高クラスの心眼。

パクリ技EX

知っているアニメや漫画、ゲームなどの技や能力がすべて使える。

神の身体EX

技や能力によるリスクや後遺症がすべて無効になる。

宝具

王の財宝
ゲートオブバビロン

天斗が倉庫がわりに使っているがちゃんと宝具の原点が入っているみたいだ。

コレクション宝具

カグツ

チ 柳生十兵衛の愛刀とされる刀（典太）にイザナギに殺されたカグツチの魂を宿した物、普通の刀の見かけの時は、典太本来の力しか無いがカグツチを纏わせると刀身が紅く燃えるような色になる。（真名解放可） 容姿

戦場のヴァルキュリア2のエイリアスの髪を肩甲骨辺りまで短くして黒髪黒目にして後ろで縛ったかんじ。

たいがいはこの格好だが世界を渡ると違う姿になったりする。

和服に新撰組の羽織りを着ているときは、帯刀している。

f a t e 編第1話（前書き）

5000アクセス突破しました。

ありがとうございます。

そしてこれからもよろしくお願いします。

f a t e 編第1話

今、冬の海に向かって落ちる神が一人いた。

天斗 s i d e

今俺は100mぐらいの高さから真下の海に向かって落下中だ。
何故こうなったかと言うとあのプーチンが俺を海面から150mぐらいのところに転移させたからだ。

「糞あの馬鹿プーチンめ神界に戻ったら覚えてろよ」

そんな風に落下していると下に魔法陣みたいなのが出来て光り出した。

「これは、サーバント召喚の陣だ」

そう言う光りに包まれて転移した。

天斗 s i d e o u t

??? s i d e

僕があかさかのミコト をやり終わったら部屋の真ん中に魔法陣が出来て光り出したら急に意識が遠退いて逝った。

??? s i d e o u t

天斗 s i d e

光りがおさまったので辺りを見渡すと一人の少年がパソコンに向かって座っていたので声をかけてみた。

「問おう貴方が俺マスターか？」

「・・・」

答えない。

「もう一度問おうお前が俺のマスターか？」

「・・・」

また答えないので不信に思い彼を揺さぶると彼は、崩れ落ちた。

「マジでかこれは洒落んなんねえぞおい」

そう彼は、死んでいた。

どうしようこれでは、聖杯戦争に出れないじゃないか。

いやまてよこれはチャンスだ、今から他のサーバントが戦っているときに介入してマスターと契約すれば、とくに凜もしくは士郎と契約できれば儲けもんだ。

よしそうと決まれば行動有るのみだ。

天斗side out

凜side

私は衛宮君を教会を出たあと少し話していた。

「話戻るけど、明日からは敵同士なんだから手加減しないわよ」

「こんばんは皆さん。お兄ちゃんはどうして会うのは二度目だね」

声の聞こえた方向を見るとそこには、ゆつくりと近づいてくる巨人と少女。がいた。

少女の方は、130くらいしかない身長。腰まである白い髪、赤い瞳。紫のダッフルコートに白いマフラー。

巨人は250センチ以上の大きさ。瞳は黒点がなく赤い。髪は無造作に伸びた黒で、ざつくばらんに切られている。

肌は浅黒く。ものすごい筋肉だ。

腰にだけ、甲冑のような服を着ている。腕にはギザギザとした2メートル近くある大剣。

少女は行儀よく裾を持ち上げて、上品にお辞儀をした。

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「アインツベルン」

凜side out

イリヤside

「こんばんは皆さん。お兄ちゃんはどうして会うのは二度目だね」
少女は行儀よく裾を持ち上げて、上品にお辞儀をした。

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

そう言って挨拶するとセイバーが見えない剣を構えた。

凜side

「アインツベルン」

「やば。あいつ、桁違いだ」

「じゃ、殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

少女が楽しそうに言った瞬間、バーサーカーは飛ぶ。

「シロウ、下がって……！」

あの巨体で数メートルの距離を飛ぶ。その落下地点に、セイバーがちょうど走り、

閃光。

二人が剣と大剣を叩きつけ、空気がビリビリと震える。

更に旋風のようなバーサーカーの大剣がセイバーを追隨する！

大剣をバーサーカーは自由自在に振りまわし、セイバーに叩きつける。

かろうじて、セイバーは不可視の剣で抑えるが、次第に押されていき、セイバーは吹き飛ばされる。

更に追隨。

避ける暇もなく、絶え間なく降り続ける大剣。

地面を砕き、木をなぎ倒し、まるで嵐のような剣筋。

セイバーがもう一度大きく吹き飛ばされる。

そのまま追隨し、立ち上がれないセイバーに幾条もの攻撃を浴びせる。

セイバーは血だらけになりながらも、立ち上がる。

勝てないとわかりながらも、防ぎようのない攻撃をひたすらに受ける。

一合いごとにセイバーの体が後ろにずれ、沈む。

大きな横合いの一閃。

セイバーは大きく吹き飛ばされる。宙に舞う体と潜血。常人なら死んでいるだろう。

それでも、剣を地面に突き立て立ち上がる。

「……くっ……シロウを守る……」

「セイバー逃げろ！」

士郎が叫ぶ。

黄金の剣を携えた少女を。

セイバーは剣を頭上に掲げている。立っているのすらキツイ少女が、威風堂々と立ち上がる。

そしてまたセイバーが、吹き飛ばされた時バーサーカーが止めの一撃を放った瞬間目を閉じた。

「108マシガン」

その声を聞き目を開くとそこには、物凄い速さの蹴りを放つ同い年くらいの少年がいた。

凜side out

第2話（前書き）

もうすぐ1万アクセス突破です。

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

でわ本編どうぞ

第2話

時は、少し遡る。

高いビルの上で周りを見渡すサーバントが、一人いた。

天斗side

あれから俺は、ビルの上に来ていた。

「うゝん何処かにサーバントいないかな」

こんな感じに捜していたら懐かしい感じのする気配がしたので、隣の方を見ると、閃光が、教会の近くで起こっていた。

「むっあれは、ヘラクレスか、よしあれに割って入ろう」

「決まっただし行くか」

そしてヘラクレスのところに着くとセイバーがやられるところだったので割って入ることにした。

「108マシンガン」

天斗side out

セイバーside

あれからバーサーカーと打ち合っていましたでしたが私が片膝を付いて立

ち上がったときバーサーカーの一撃で吹き飛ばされてバーサーカーを見ると止めの一撃を放とうとしていた。

<駄目ですね此処までのようです、すみません士郎>

そう思い目を閉じた時だった。

「108マシンガン」

その声の方を見ると黒髪黒目のサーバントがバーサーカーを蹴り飛ばしていた。
セイバースide out

イリヤside

バーサーカーがセイバーに止めの一撃を放とうとした時だった。

「108マシンガン」

その声とともにバーサーカーが蹴り飛ばされた。

イリヤside out

天斗side

うん108マシンガンが綺麗に決まった。

そんな事を思っているとヘラクレスが立ち上がりこっちを見ていた。

「久しぶりだなヘラクレスいっちょやるか？」

そう言うとヘラクレスは、剣をとり構えた。

すると凜が呟いた。

「ヘラクレス、ギリシア最大の大英雄じゃない」

天斗side out

凜side

「ヘラクレスギリシア、最大の大英雄じゃない」

思わず呟いてしまった。

凜side out

天斗side

凜が呟いてから俺も構えを取ってこう言った。

「いざ尋常に」

それに合わせるようにヘラクレスがほえた。

「」

その瞬間ありえない速度で大剣振り下ろし襲い掛かって来た。

俺は、それをカグツチ（見た目は、典太）で受け止め、弾き返し、袈裟切りで返すとヘラクレスはそれを大剣で受け流し反撃をし、また俺がそれを受けて反撃する。

それを数十合繰り返してヘラクレスの渾身の一撃を避けるために後ろに飛び距離を取って言い放った。

「次で最後だ」

そう言つてカグツチを平突きのために腰を落とし頭少し上に構えあの言葉を口にする。

「悪・即・斬」

そう言つとヘラクレスも気付き距離を詰める。

天斗 side out

凜 side

「久しぶりだなヘラクレス」

いきなり現れたサーバントがそう言つてヘラクレスと打ち合い始めた。

ガキン キンッ

ドコン ガン カキン

ギンッ キン ドカン

さつきから音と閃光と火花だけがそこに鳴り響きその後には、数々のクレーターが出来ていた。

そんな光景を静かに見ていたら急に剣閃が止み二人が、現れ距離をとり乱入して来たサーバントが頭の少し上に日本刀を構えてしゃべり出した。

「悪・即・斬」

それを聞いたバーサーカーが血相を変えて走り出した。

凜side out

セイバースide

「久しぶりだなヘラクレスいつちやるか？」

さつきバーサーカーを蹴り飛ばしたサーバントがそう言うത്バーサーカーが構えた。

そして謎のサーバントが合図をした。

「いざ尋常に」

バーサーカーはそれに答えるようにほえた。

「

」

そして二人は、それこそランサー並の速さで打ち合い始め大剣と日本刀がぶつかり合う度に火花が散った。

そしてバーサーカーが渾身の力を込めた一撃を放ちそれを謎のサーバントが避けるために後ろに飛び距離をとりしゃべり始めました。

「悪・即・斬」

そう言うって頭の少し上に突きの構えを取るとバーサーカーがそれを阻止しようと走り出しました。

セイバー side out

イリヤ side

私は、今信じられないことをめに行っているわ。

最強のサーバントのはずの私のバーサーカー、ヘラクレスがさっき割り込んで来たサーバントと打ち合っている。

ありえないバーサーカーは、知性や理性を失う変わりに桁外れの攻撃力を手に入れてるのにあのサーバントは、普通にヘラクレスと打ち合ってる。

「私のバーサーカーは、ヘラクレス、ギリシア神話最大の大英雄よ、そのヘラクレスが知性や理性を捨てて攻撃力を得たのにあのサーバントは、普通に打ち合えるなんて何処の英霊なのよ」

いつのまにか声に出ていた。

ヘラクレスとあのサーバントが離れたそうするとあのサーバントが構えを変えてしゃべり出した。

「悪・即・斬」

すると知性の無いはずのバーサーカーが走り出した。

イリヤ side out

天斗 side

ヘラクレスが突っ込んでくるがもう遅い。
俺は、光りを越える速度で平突きを放った。

「喰らえ」

「牙突」

そう言っただけ俺は、牙突を繰り返した。

天斗 side out

士郎 side

俺は、遠坂と教会で聖杯戦争に参加することにして遠坂と話合っていたら250cmは、ありそうな巨人が襲い掛かって来てそれをセイバーが受け止めたが撃ち合う内に吹き飛ばされバーサーカーと呼ばれた巨人が止めを刺そうとした時バーサーカーが蹴り飛ばされた。

そしてその蹴り飛ばしたおそらくサーバントと思われる男と撃ち合いが始まり、そして二人が離れると片方は、いつの間にか日本刀を持っていて頭の少し上で構えた。

「牙突」

そう叫ぶとそこにそいつは、いなかった。

士郎 side out

アーチャー side

私は、今信じられない光景を目にしている。

それは、バーサーカーとまともに撃ち合ってるサーバントがいることだ。

サーバントが近くにいるとわかった瞬間にこの丘に来たが、セイバーがやられる間にバーサーカーを蹴り飛ばして今もランサー並の速さで撃ち合っている。

バーサーカーが渾身の一撃を放とうとした時謎のサーバントが後ろに飛び距離をとり何か言って私の目でも追えない速さで攻撃を仕掛けた。

アーチャー side out

第2話（後書き）

カグツチは、イザナギに殺されたイザナミの子供です。

そのカグツチを天斗の創った典太に魂と能力を一緒に入れた刀です。

典太の説明は、その内します。

第3話（前書き）

いろいろな方からsideが多くて読みづらいという指摘がありましたので少なくして書きました。

ご指摘ありがとうございます。

それと、もうすぐ1万5千アクセス突破です。

ありがとうございます。

これからもよろしく願いします。

第3話

あれから10秒程たって砂煙りがおさまった。

セイバー side

私は、その光景に目を疑った。

そこには、日本刀に串刺しにされ持ち上げられるバーサーカーの姿があった。

セイバー side out

アーチャー side

丘の上から見ていたがあのサーバントがバーサーカーを串刺しにしている日本刀を見て目を疑った。

あのサーバントが持っている太刀は、典太だったからだ。

アーチャー side out

天斗 side

俺は、カグツチでヘラクレスを串刺しにして持ち上げていた。

何故カグツチで突き刺したかと言うとイザナギに殺されたカグツチの魂と能力を宿した刀は、彼の有名な典太だからだ。

典太には、邪を払ったという逸話が有るからだ。

だから俺は、ヘラクレスの狂化を解くためににわざわざ自分で創ったコレクションを引っ張り出したという訳だ。

「おいヘラクレスそろそろ正気に戻ったか？」

「うう」

「はっ、貴方様のような方が何故このようなところに」

「まあ仕事だ」

「仕事とは、バグの事ですか？」

「ああその事だ」

「何故貴方様が直々に出向かれたのですか？」

「手が空いているのが俺だけだったのと半分俺の暇つぶしだ」

「そうですかでは、急いでバグの修正をしますか？」

「いや少しこの聖杯戦争に参加するからまだいいそれと今回俺は、サーバントとして出るから普通に話してくれ」「わかった貴方は昔からそうだったからな」

「それとこれから名乗るからそれに合わせてくれあと俺が創造神だつて事ばらすなよ」

「わかった」

俺とヘラクレスは、周りには、聞こえない声で会話を終えた。

そして俺は、ヘラクレスからカグツチを抜きこう言った。

「俺は、今回イレギュラーで召喚されたエクストラクラス、ジョーカーのサーバントだ」

イリヤと凜がこう言った。

「そのジョーカが何で此処にいるのかしら」

「そうよ貴方のマスターの命令？」

「いや俺は、さっき言った通りイレギュラー何だが今回の聖杯戦争には、俺を含めて九騎のサーバントがいる」

俺がそう言つと凜が驚いたように言った。

「九騎そんなのありえないわ」

「まあありえないかもしれないが、いるからには仕方が無い、話しを戻すが聖杯からの情報によれば俺と別にもう一騎余分なのがいるから俺は、そいつを倒すためによればれたらしい」

（思っきり嘘八）

「まあいいわで、なんでそのもう一騎のイレギュラーを倒すために呼ばれたあんたが私達の戦いに横槍入れているのか聞きたいわね」

「そんなの簡単だ」

「どういつ事よ」

「お前らがこんなところで戦つてると捜すのに邪魔なんだ」

「くっ」

悔しそうに凜がそう言った。

「まあそう言うわけだからその嬢ちゃんも引いてくれ」

「うゝんわかった、でも条件が有るわ」

「まあ俺に出来ることならいいが」

「簡単よジョーカーが私のサーバントになればいいだけだから」

END

緊急アンケート実施（前書き）

アンケート御協力お願いします。

緊急アンケート実施

緊急アンケートです

これからの話しの進行についてアンケートします。

1これからマスターを凜かイリヤのどちらかにします、どちらにしたほうがいいか聞かせてください。

?凜をマスターにして桜の救済後セイバールートセイバーと士郎が現代で恋人同士END。
?イリヤ

をマスターにしてUBWルートに進みイリヤの死亡を回避してギルガメッシュ撲殺してアーチャーさようならEND。

期間は、1週間〜2週間の間をお願いします。

それでは、アンケート回答待ってます。

これからもよろしくお願いします。

第4話（前書き）

アンケート御協力ありがとうございました。

士郎のサーバントになってセイバールートにしては？という回答がありおもしろそうなのでセイバールートに移行します。

もうすぐ24万アクセス突破します。

ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

第4話

ある冬の坂道で2人のマスターと3騎のサーバントが固まっていた。

天斗side

「簡単よジョーカーが私のサーバントになればいいだけだから」

（さてどうしようか？）

（イリヤを助けるならイリヤに付いた方がいいだろうし）

「いい提案だな、ちょうどマスターがぽっくり逝っちまったしな」

「なら決まりねジョーカー」

（いやまてよ、ヘラクレスがいるならギルガメッシュぐらい余裕じやねえか）

「いや、やめとく」

「なんで？」

「ヘラクレスは、強いからまた闘いたいだけだ」

「まあいいわ今日のところは、面白い物も見れたし帰りましょうバ―サーカー」

イリヤは、そう言って帰って行った。

(さて問題は、これからだな)

「ちょっとあんた」

(やっぱり来たか)

天斗 side out

凜 side

「ちょっとあんた」

どうもさっきのインツベルンとの会話を聞く限りコイツのマスターは、今は、いない。

という事は、再契約して私のサーバントに出来る。

そうすればインツベルンのバーサーカーと互角のコイツがいれば簡単に終わる勝ち残ることが出来るわよね。

「あんた今マスターいないんでしょなら私と再契約しない」

ふふこれで今回の聖杯戦争は、私の勝ちね。

「いややめとくわ」

「じゃあ早速再契約の準備をつてええなんで」

「それは、遠くの丘からヘラクレスもろとも此処ら辺りを吹き飛ばそうとしていたアーチャーとは、気が合わなさそうだからだ」

「そんな事で」

「まあそんな訳だからそのセイバーのマスター俺と再契約してくれ」

私は、その言葉で目眩がした。

凜side out

士郎side

「まあそんな訳だからそのセイバーのマスター俺と再契約してくれ」

なんか良く分からないうちに話しが進んでいた。

「なんで俺なんだ」

「それはなセイバーは、最優のサーバントだからセイバーといった方が、目的が果たせそうだからだ、それに寝床が欲しいし美味しい飯が食いたいからな」

「目的と寝床は、いいとしてなんで俺の料理が美味しいと思ったん

だ？」

「勘だな」

「勘か・・・」

「まあそんな訳だから頼むよ」

「まあそう言うことなら仕方ないな」

「そうか、なら俺は、ジョーカーのサーバントだよろしく頼む」

「ああそつだな俺は、衛宮士郎だよろしくな」

そう言つて俺は、ジョーカーと再契約した。

士郎side out

天斗side

あれから士郎と無事再契約を交わした。

「士郎っ離れて下さい」

俺が、士郎と再契約して少し話しているとセイバーがそう言つて不可視の聖剣で切り掛かつて来たのをカゲツチで受け止める。

「おいおいセイバーいきなり切り掛かつて来るなんてどういふつもりだあ？」

俺は、そう言いながら不可視のエクスカリバーを弾き返す。

「あなたこそどういいうつもりですかジョーカー」

セイバーは、そう言いながら再びエクスカリバーで切り掛かって来るがそれをまた受け止める。

「どうもこれも俺は、士郎と再契約したんだ」

「それは、本当ですか士郎」

「ああ本当だセイバー」

「そうですね仕方ありませんですがジョーカーあなたが不信な行動をとったときは、私があなたを切ります」

「ああその時は、好きにしてくれ」

「分かりましたその言葉信じましょう」

「ああそれは、いいとして問題は、あそこで残念そうに落ち込んでるのをどうにかしなくてはいけないようだ」

「ええそうですね」

「「という訳で士郎頼んだ（頼みました）」」

「なんで俺なんだ？」

「お前が衛宮士郎だからだ」

「なんだよその無茶苦茶な理由は」

「今考えた」

「仕方ない遠坂は、俺が何とかする」

そう言っ て士郎は、凜のところに行っ て話し始めたと思っ たら凜は、士郎に「全部あんたのせいだ」と言っ てガンドを打ちながら士郎を追いかけた。

この晩この隣町に「なんでさ」という悲鳴とともに破壊音が響いたという。

第5話（前書き）

約1年も開けてしまいすいません。

凶悪なスランプで全く書けませんでした。

やっと書いたのがこれですが誤字、脱字やおかしなところがあればご指摘下さい。

それでは、本編スタートです。

第5話

ある武家屋敷で5人の者達が机を間に挟み会話していた。

士「これからどうするんだ？」と士郎の質問に

凜「そうねこれからは、敵どうしなんだから次会うときは、殺し合う時よ」凜がそう答える。

士「遠坂、オレは、遠坂とは、闘いたくない」

天「そうだな此処は、同盟を組むんだほうがいいかな」

凜「同盟って言ったって何のために？」

セ「そうですね、バーサーカーやほかのサーウ、アントを倒す為と
いったところですか？ジョーカー」

天「ああその通りだセイバー」

ア「私もその案には、賛成だな」

凜「アーチャー、あなたが言うなら仕方ないわね」

士「よかったこれで遠坂と戦わなくてすむんだな」

凜「ええそうよ、という訳で今日から私は、此処でお世話になるわね」そう楽しそうに言う凜に

士「ちょっと

と待ってくれ」慌てたように待ったを士郎がかける。

凜「何よ」少し不機嫌そうに凜が聞く。

士「此処に住むのは、まずい朝には、藤ねえや桜が来るんだ」

凜「そんなの大丈夫よ」

士「なんで何だ？」

凜「だっててきとうに言いくるめるもの、そんなことよりあなたの
もう一人のサーバントのことのほうが先よ」

天斗side

天「何だ？まあ聞きたいことは、分かるんだがな」

凜「あなた何者よ」

少し不機嫌になったな。白々しく答えて見るかな。

天「何者って言われてもジョーカーのサーバントとしか言えないな
あ」

凜「じゃあ何処の英霊よ」

天「あえて何処のって言うとな日本のだな」

凜「そう」

凜「それで日本、の英霊でそんな羽織りを着ているってことは、新
撰組の誰かってこと？」

天「さあな、土方歳三かもしれないし斎藤一かもしれない」

凜「へえ土方に斎藤、」

ア「凜、ちょっと待て」

凜「どうしたのよアーチャー」

ア「まだ決めつけるのは、早いぞ凜」

凜「どう言つことよアーチャー」

ア「何簡単だ、まずそのジョーカーの使っていた日本刀だ」

凜「何言ってるのよアーチャー、新撰組の誰かなら日本刀を使うのは、当たり前じゃない」

ア「ああ確かに普通の日本刀を使っていればな」

凜「普通の日本刀ってどういうこと」

ア「おそらくジョーカーの使っていた日本刀の銘は、大典太だろう」

凜「大典太？」

ア「大典太とは、平安時代末期の名工光世典太が打つたとされる刀で前田家の家宝で有名な業物だ。」

天「御明答、確かにあの時俺が使っていた刀は、大典太だ」

凜「嘘じゃああんたは、誰なのよ、それになんでアーチャーは、その大典太だってわかったのよ」

ア「さあ、マスターのせいで記憶が曖昧でな」

天「まあ俺は、新撰組じゃないとだけ言っておこうか練鉄殿」

ア「貴様何処でそれを」

天「さあな、ただお前の願いもセイバーの願いもどちらも間違っている」

凜「どういう事よアーチャー」

ア「どういとは？」

凜「とぼけないでアーチャー、あなた自分の記憶がないんじゃないのかしら」

ア「なに簡単な事だ生前私は、練鉄という二つ名で呼ばれていたらしい他の事は分からんこれも君の不完全な召喚のつけだぞ」

凜「うっそれを言われると痛いわね、はあもういいわこの話しは、おしまいもう遅いし続きは、明日にしましょう。」

士「ああそうだな。明日は、学校だしな」

セ「そうですか、なら今日は、此处までにしましょう」

士「そう言うことだから遠坂は、離れを使ってくれ」

凜「分かったわそれじゃあ衛宮くんおやすみなさい」

こうして作戦会議は、終わったのだった。

まあこの後セイバーが何処で寝るのかで騒ぎになったのはささいなことであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196/>

消えた主人公は創造神

2011年7月16日07時11分発行